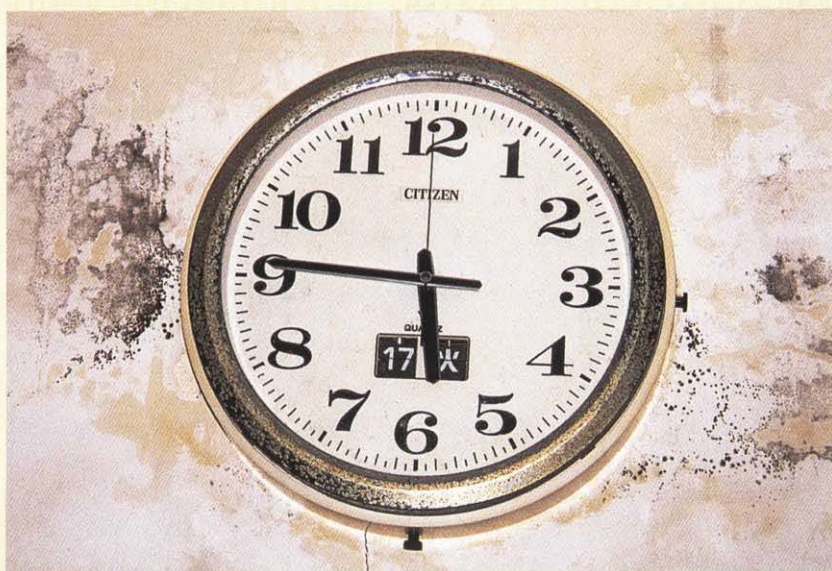


甲陽学院震災記



甲陽学院中学校西校舎正面入口の時計
— 今も止まったまま —

寄贈

震災文庫 8 - 183

甲陽学院震災記

学校法人辰馬育英会

甲陽学院高等学校・中学校



誤

正

九七頁	上段	←八	↑四	内側から書齋が倒れ	内側から書棚が倒れ
九七頁	下段	←二	↑九	数軒の和建築	数軒の和建築
九八頁	下段	←三	↑五	裏へ大回り	裏へ大回り
九八頁	下段	→八	↓二	本家の三人が	本家の惣三人が
九九頁	上段	→二	↓三	T医院のお宅の	T医院のお宅の
百頁	上段	←五	↑三	数軒の倒壊	数軒の倒壊
百頁	上段	←六	↓十二	親戚江家は	親戚江家は
百三頁	上段	←七	↑六	上を吃驚した	上を見て吃驚した
百五頁	上段	→八	↑二	A医院が完全に	A医院が完全に

以上

～震災1周年前に～

迎春

96年元旦

旧年中は大変お世話になりました。あの大地震の
誠意難うございました。あの大地震の
折避難所として大体育館が存在は
砂漠のオアシスに似て。どんなにか地え
住民の心に安らむと与えて頂いたか
ばかり知れず。
あらためて御礼
申上ります。

西宮堀切町

被災住民より



郵便はがき

662

甲陽学院中学校

御中

西宮市中原二丁目15

662

《中学校》



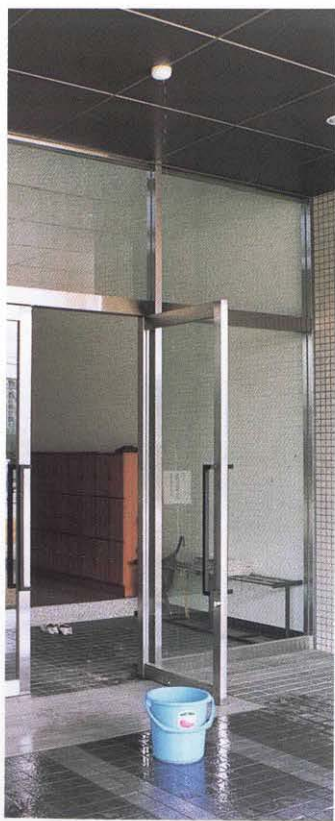
校門前



東校舎南の市道



生徒通入口



東校舎玄関（天井から水漏れ）



校門南



森具川



東校舎南の市道



芸術棟と体育館奥の接合部



東校舎第二棟と第三棟の接合部



森具川の連絡橋東



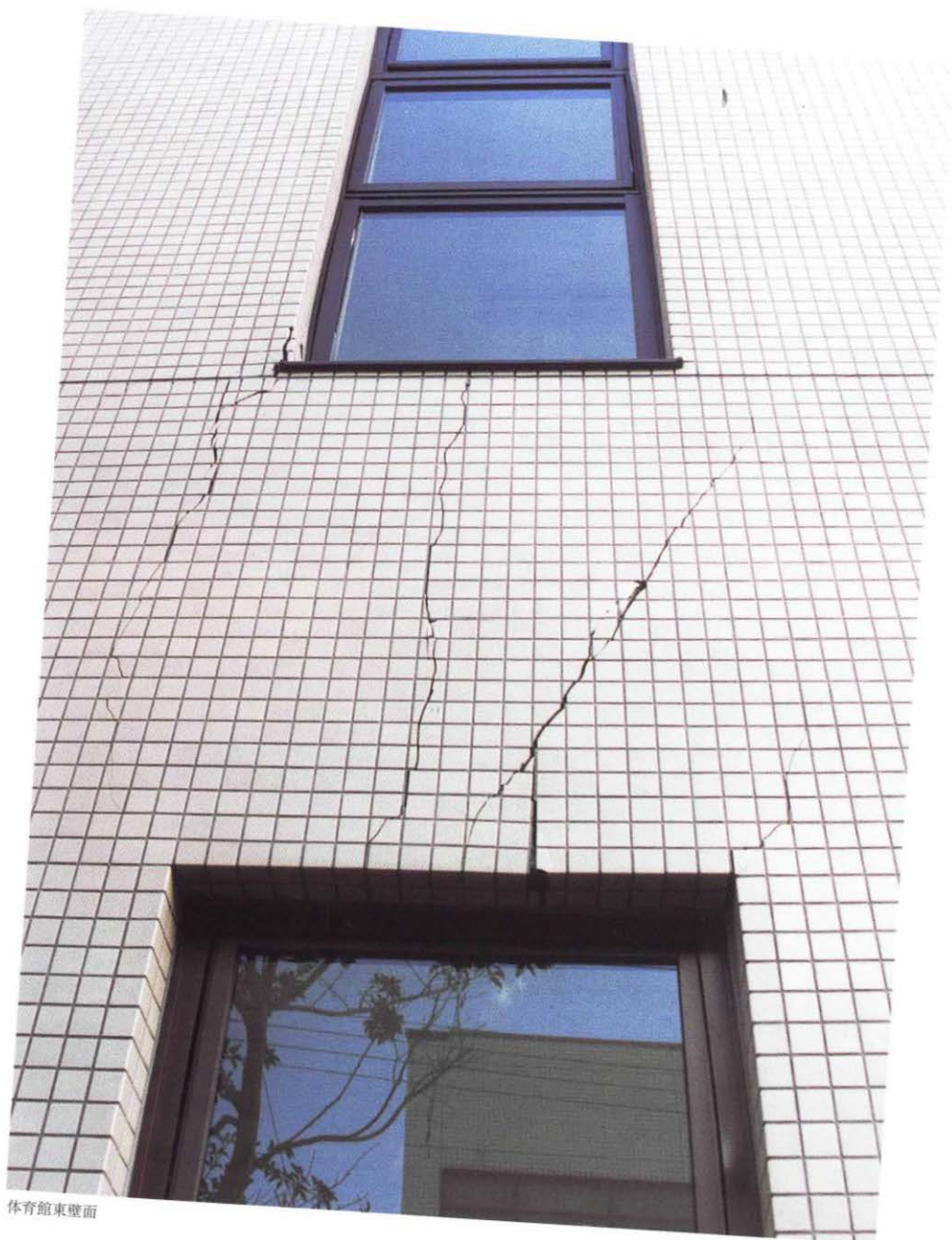
西校舎東通用門



体育館正面入口



体育館東入口



体育館東壁面



全壊した焼却炉



体育館の中の避難住民 (1995.1.24)



体育館の中の避難者 (1995.1.24)



体育館と西校舎の接合部 (20 cm 段差)



西校舎正面入口の時計



シートを被せた西校舎



西校舎木造第一棟



西校舎第一棟廊下

《高等学校》



テニスコート



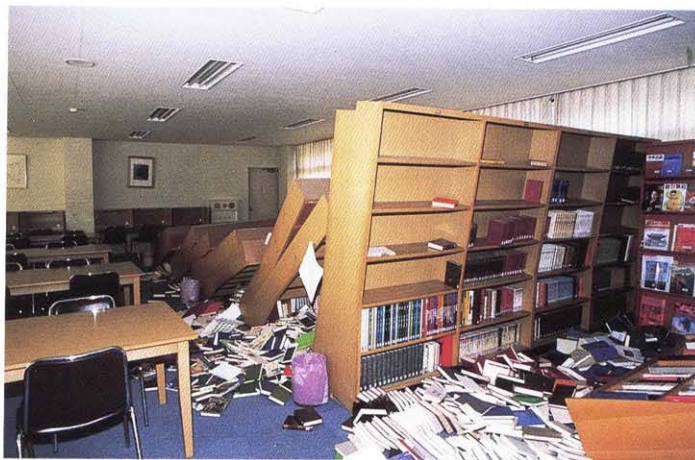
守衛室上部のコンクリート壁



図書室



図書室



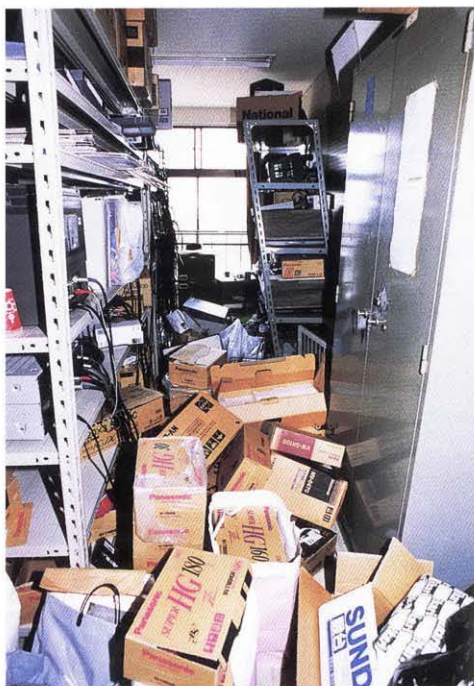
図書室



視聴覚準備室



藥品庫



物理準備室



化学實驗室



音楽研究室



物理準備室



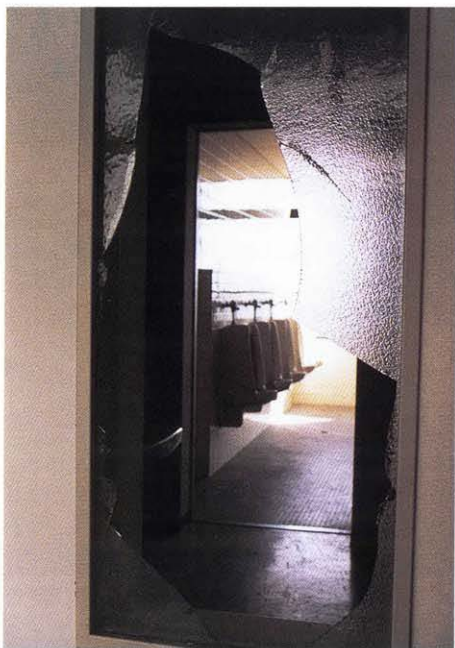
芸術研究室



芸術作業室



研究室棟三階廊下



生徒棟三階トイレ



社宅



杜宅



杜宅



社宅（左）と倒壊したマンション（正面）

目

次

写真記録

一	阪神・淡路大震災の概要	1	三	生徒の安否確認	22
二	授業再開過程	15	四	被害状況	25
1	高等学校の再開過程と入試対策	18	1	学校の物的被害	28
2	高等学校の震災後の日程	19	2	特別教室等の被害状況証言	29
3	中学校の再開過程と入試対策	24	六	学校行事	47
4	中学校の震災後の日程	25	1	学校日誌の記録	49
五	生徒の通学に関する対応	37	1	中学校	49
3	生徒・保護者の被害	37	②	高等学校	51
4	教職員の被害	37	2	スキー	53
5	教職員社宅の被害	37	3	卒業式	54
1	自転車通学	42	4	創立記念音楽会	54
2	ホームステイ	45	七	クラブ活動	58
3	通学時間調査	47	八	大学入試	60
4	被災生徒への支援	63	九	校内での支援	63

①	見舞金等の支給	63
②	入学金・授業料の免除	63
2	外部団体からの支援	63
①	義援金	63
②	奨学金	67
③	現物援助	67
④	激励の手紙	68
十	奥野正弘君追悼	70
十一	地域とのかかわり	
1	避難所開設	81
2	校舎使用	85
3	グラウンド開放	87
十二	手記	88
十三	復興工事	114
十四	震災資料	
1	資料目録	121
2	資料事例	133

復刻『甲陽だより』第五五号（抜粋）	159
復刻『甲陽だより』第五六号（抜粋）	163
余滴	164
復刻『甲陽』第三三号	

編集後記

執筆者 各文末あるいは文頭に銘記
 写真撮影者 口絵カラー

校舎関係 中村 泰三・山内 英正
 社宅関係 藤原 浩二・新田 正昭

表紙カバー・本文 山内 英正

一 阪神・淡路大震災の概要

1. はじめに

目覚め前の眠りの中、轟音とともに体が激しく揺すぶられた。連休も終わり、今日から入学試験の本格的な準備が始まるという日だった。目を覚まされた私は訳が分からなかった。常夜つけている豆電球が消え、あたりは闇になった。とてつもない地震が起こっているのだと気付き始めたが、「ここは東京とちがうぞ。何をするんや。」地震であることが直観的に分かっても本当にそうであるということは、なかなか信じられなかったし、そんな余裕などともなかった。揺れがおさまリ、家族が大声で無事を確認しあった。有難いことに全員無事のようだ。暗闇の中、時計は六時前を指していた。余震が続く中、外に出たが、特にこれといって被害は見当たらなかった。この時は興奮していて分からなかったが、直後に発生した余震が今までのところ、最大余震と記録されている。私は電池を買いため、寝間着姿でローソンへ走った。寒さが身に滲みた。往来には人々がやはり寝間着

姿で大勢出ていて、ただならぬ雰囲気だ。お互いに無事の確認や、恐怖の様子を話し合っている。建物の被害は見当たらなかったが、道路が所々陥没し、水があふれている。ローソンにも人だかりがしていたが、店員はレジが動かないから売らないという。この非常時に何を言ってるんだと思い、店員に三〇〇円つかませて電池を「購入」した。家に帰って、中の様子を見て回った。すわりの悪い家具が二、三倒れていたが、特に東西方向に向いているタンス等は何事もなかったかのようには倒れて鎮座していた。しかし、その周りに散乱しているのは明らかにタンスの中身であった。ラジオが付き、各地の震度を列挙していた。震源は淡路島でマグニチュード七・二であることを言っていた。正直、あの揺れで淡路島で震源で、しかもM七・二と少し納得できないところもあったが、今はそれより家の片付けが先である。薄明かりになったところ、停電が復旧した。有難かった。私の家の周囲でも、戦前から焼け残った古い家で何軒か倒壊しているようであったが、救急車がやって来るようなこ

とはなかった。このような状況で今日は仕事があるので
ろうかと思いがち、なかなか身の入らない片付けを始
めた。我々のもとに被害の状況が伝わってきたのは、確
か七時のニュースが始まってからだっと思う。片付け
の片手間に見た映像に息を飲んだ。阪神電車が横倒しに
なっている。石屋川の車庫が倒壊し、電車が潰れている。
この時初めて、大変なことになったんだと思った。続い
て、神戸の家々が軒並み倒壊している様子、三宮のビル
が倒れている様子が写しだされた。阪急もやられている。
阪神高速神戸線の高架橋が横倒しになっている映像を見
た時は、背筋が寒くなった。急に、我々はこれからどう
なるのかと、不安と緊張が襲ってきた。昼過ぎになって、
ようやく学校へ出る気になった。自転車です。酒蔵通り
を西へ進んだ。新川や津門川に架かる橋は軒並み五〇cm
から一mも抜け上がっていた。臨港線の「白雪」の前で
は、タンク車が陥没した道路に後輪をはめていた。西へ
進むにつれて倒壊した建物が目につくようになり、被害
が大きくなっていることがわかった。極めつけは白鹿酒

造記念館の旧館の破壊の様子だった。ここに以前何があ
ったのか、知らない人ならまったく分からないと思われ
るほどの瓦礫の山になっていた。そして、私の印象に強
く残っているのは、その破壊の状況である。以前私がこ
の博物館を見学した時、確か大きな醸造用の樽は、建物
の上の方に展示してあったと記憶している。その大樽が
瓦礫の一番上に、いわばほとんど展示してあった位置そ
のままで転がっているのである。あまりに急な衝撃のた
め、展示物が揺すぶり落とされる前に、建物全体が倒壊
したことを物語る破壊の光景であった。逃がっている暇な
どない地震だったんだ、ということがその光景から読み
取れた。夙川の土手を登ると、正面から今まさに煙が立
ち上ろうとしていた。長田区の火災は聞いていたが、近
くの芦屋市でも火災が発生したことは、西宮でも同様の
ことが起こるのではないかという不安をふくらませた。
学校ではスプリンクラーが作動し、一部破損している箇
所もあったが、壊滅的な被害は免れた。それよりも、生
徒や職員の安否を確認する先生方の姿を見て、ようやく

緊張と不安が少し和らいだ。家族といえるより活気を感じることができたのだと思う。また、生徒がいる差し入れを行ってくれる姿には逆にこちらが元気づけられた。私の家は木造なので、次に大きな余震が来たらどうしよう、というかなりの不安があった。正直、このまま学校で寝泊まりしたい気持ちだったが、私一人だけが家族とは別の安全な建物の中にいるのしびれがなかったのだ、今後の予定を確認して学校をあとにした。道路は各所で封鎖され、緊急自動車のサイレンがひっきりなしに響き渡り、ヘリコプターの爆音が轟き、まさにパニック映画の世界そのものであった。帰りに甲子園浜に立ち寄った。浜は何事もなかったかのように静まりかえっている。軽く打ち寄せる波の音だけを聞いていると、穏やかな冬の昼さがりそのものだった。しかし、対岸の湾岸線の落橋、そのむこうに広がる、傾いた太陽に反射した、まるで黄土色のスモッグに包まれたような神戸の街を見ると、何かやり切れない気持ちだった。家の片付けはかなり進んだようだが、ガスと水道は復旧のメドがたつて

いない。いつまでこのような暮らしが続くのかという不安は、日暮れとともに倍増していった。もちろん、家と家族が無事だったことだけでも有難いと思わなければいけないのだが……。余震が続く中、一日が終わろうとしている。朝のラジオで、大阪でケガ人が一名と言っていた被害は、この時すでに二千人以上の死者を数えていた。

一九九五（平成七）年一月一七日早朝、淡路島から阪神地域を襲った地震は、死者五、五〇二人に達する戦後最悪の被害を出してしまった。気象庁はこの地震を『平成七年 兵庫県南部地震』と命名した。あれから、雪の日、風の日を越え、花が咲き、新緑が芽生え、梅雨を通り越し、今、我々は夏の盛りの中にいる。この間、ガス・水道・電気といった生活関連施設は復旧し、鉄道も一部を残してはぼ従来の運行が可能になった。しかし、未だに多くの方が、いつ終わるとも知れない仮設住宅暮らしや避難所暮らしを余儀なくされている。秋には失業保険の一時給付の期限がやってくる。街の整理はかなり進んだようであるが、被災された人の生活という目に見え

ない部分が、特に被害の少なかった地域では、『復興』という言葉に覆い隠されてしまっているような気がする。捨てても捨てても余りある瓦礫の処理の問題、都市の再建など、問題は山積みで、震災はまだまだ終わっていないということをしっかりと認識しておかなければならないと感じる。

2. 地震の諸元

兵庫県南部地震では、戦後初めて震度七が適用されるなど、被害の大きさ、その他の点で注目を集めている。以下に今回の地震に関するデータをいくつか紹介したい。

発生時刻：一九九五年一月一七日 五時四六分

(五一・七一秒)

震 源：北緯三四・六度 東経一三五・〇度の淡

路島北部で 深さ二〇km

(北緯三四・六〇四度 東経一三五・一

三四度の明石海峡で 深さ一七・二km)

地震の規模：M七・二

(一) 内の数値は京都大学防災研究所発表のデータ、その他は気象庁発表のデータである。

また、本地震による震度の分布(気象庁一月一七日発表)は以下のように非常に広範囲にわたった。

震度六(烈震)：神戸

震度五(強震)：京都、豊岡、彦根

震度四(中震)：大阪をはじめ東は岐阜から西は呉ま

で

震度三(弱震)：東は諏訪から西は大分まで

震度二(軽震)：東は横浜から西は佐賀まで

震度一(微震)：東は小名浜(福島県南部)から西は

平戸まで

なお、神戸の震度がのちに震度七(激震)に修正された

ことは周知の通りである。先にも述べたが、日本において震度七が適用されるのは今回の地震が初めてである。

日本の震度階は一九四九年に気象庁によって、主に体感や被害の状況を基準とした〇～七までの八階級が定められたが、一九九一年以降〇～六までは日本が世界にさき

がけて開発した計測震度計によって自動的に算出されるようになった。しかし、震度七は現在でも「家屋の倒壊率三〇%以上」という基準のみを適用しているため、現地調査を行わない限り発表が不可能である。神戸の震度があとから修正されたのはこのためであることは、いままら言うまでもない。ただ、「震度」の持つ意味合いが若干異なることに注意していただきたい。つまり、震度六までの数値は、被害の大きさよりも「機械で測った揺れの大きさ」を示すのに対し、震度七は、揺れの大きさよりも「被害の大きさ」を示すものになっているという点である。現在、気象庁で震度七まで自動的に震度が算出できるよう、計測震度計の改良が進められており、完成すれば「震度」が「被害の大きさ」ではなく、「揺れの大きさ」を示す尺度として統一される。

ところで、この計測震度計による震度の算出は、地震動の加速度 (gal) — 大きな数値ほど強い衝撃であること — を示すと、周期 (Hz) — 大きな数値ほど激しい振動であること — を示すに依っている。ちなみに、大阪ガスの

データによると、神戸市中央区葺合で八三三 gal 、西宮市今津で七九二 gal の最大加速度を観測している。震度計測の上限である震度六は加速度四〇〇 gal 以下であるから、今回の地震動の激しさがうかがえる。また、卓越した揺れの方向は、以下に示すように場所によって相違があるようだが、これも尋常な大きさではない。

神戸海洋気象台 (洪積台地上) … 南北：八一八 gal 、
東西：六一七 gal 、上下：三三三 gal 。

神戸大学工学部 (岩盤上) … 南北：二六九・八 gal 、東西：三〇六・三 gal 、上下：四四六・五 gal

海洋気象台の上下方向の加速度については、計測ミスが指摘されているようだが、ここに見られるように、岩盤上よりも洪積台地上の方が加速度が大きくなることがわかり、軟弱地盤が地震に弱いという従来の考えと一致する。この理論でいくと、洪積台地上よりさらに軟弱な沖積平野上の方がより加速度が大きくなりそうなのだが、そうとも言い切れないデータが出ている。先ほどの葺合や今津は沖積平野上であるのだが、特に水平方向の加速

度は沖積層上よりも、その地下に埋もれた洪積層上の方が大きな数値になっている場合が数例見受けられたのである。つまり、必ずしも軟弱な沖積平野の地表で全ての加速度が大きくなるとは限らないという、従来の考えとは一致しないデータが得られたのである。また、水平方向の加速度に比べ、上下方向の加速度が予想に反して小さかったことも、謎として注目されている。

最後に余震について若干述べる。余震は規模の大小、一日あたり回数の多少を繰り返しながら現在のところ順調におさまっている。本震発生から六月一五日までの余震と見られる地震は二、〇六〇回にのぼっている（大阪管区気象台観測）。余震の震源は淡路島の北淡町から六甲山地を通り西宮市北部に至る延長約六〇km、幅約五km前後の帯状地帯の地下一〇km前後に集中している。現在までの最大余震は以下に示す四例で規模はいずれもM四・九である。

発生時	震央の位置	深さ	最大震度
一七五五・〇三	四九・八七N 二三度八・〇E	兵庫縣東部沿岸	七km 四三

一七五五・五三	三四度〇・七N 一五度八・九E	兵庫縣東部沿岸	八km 四四
一七七七・三八	三四度六・九N 一五度六・二E	兵庫 大阪府境	二km 四三
一七八三・三七	三四度六・七E 二四度八・四E	淡路島北部	一三km 四四

3. 被害の概要

本地震はすでに報道されているように高度成長後の日本が経験した初めての都市直下地震であった。地震の規模M七・二は内陸直下型としてはかなり大きい。戦後起こった内陸直下型地震でM七以上を記録したのは、一九四八（昭和二三）年六月一五日の福井地震（M七・一）と、一九六一（昭和三五）年八月一九日の北美濃地震（M七・〇）の二件しかなく、今回の地震が三件目で、しかも最大規模のものということになる。ただ、M七クラスの地震といえ、大地震ではあるが、巨大地震には少し足りない。一般的に巨大地震といわれるM八クラスの地震は、プレート境界付近で発生する。プレート内部に発生する内陸直下型では、一八九一（明治二四）年一〇月二四日に発生した濃尾地震のM八・〇のような例外的規模のものを除けば、ほぼM七クラスである。しかし、だ

からといって侮ってはいけない。内陸直下型の特徴は震源がせいぜい一〇〜三〇kmと浅いことである。同じ規模の地震の場合、震源の浅い方が地表面に与えるダメージが大きいことは言うまでもない。震源直上のごく限られた範囲に壊滅的な被害をもたらすのが内陸直下型地震の恐ろしい点である。今回、その震源の直上が大都市という超過密地帯であったことが、被害をより大きくした。

その被害の概要であるが、兵庫県を中心に大阪府・京都府を含め、死者・行方不明者は五千五百人以上に達した。

家屋の損壊は一〇万棟を超え、避難者の数は兵庫県内だけで二三十万人以上にのぼった。家屋損壊の特徴は、木造家屋に被害が集中したこともそうであるが、二階建て家屋や一階がピロティ形式になっている家屋における一階部分の圧壊、中高層建築物における中層階の破壊、瓦屋根家屋の軽量屋根家屋に対する倒壊率の多さ、などが挙げられている。これらは強烈な上下動による破壊を特徴づけるものであると報告されている（先程述べたよう

に、加速度のデータはこのことを支持しないのだが……）。また、神戸市から西宮市の山麓部にいわゆる倒壊率三〇%の地帯が出現したことも今回の特徴である。倒壊した建物から出る瓦礫の量は膨大で、処理に手を焼いた各市は、違法な「野焼き」を始めた。西宮市でも甲子園沖の埋立地で野焼きによる処理を始めたが、春になり風向きが南に変わると、煙が住宅地を直撃し、また、煙が来なくても土壁を燃やす時に出る異臭がずっとただよっていた。住民の苦情と県からの行政指導で各市とも四月いっぱいまで野焼きは中止された。現在西宮市では同じ埋立地に仮設の焼却炉を建設し、処理を行っているが、それでも時折風に乗って、あのいやな臭いが漂ってくる。瓦礫の処理は更に一年以上かかるようで、当分このいやな臭いとのかきあいには続きそうだ。

避難所は兵庫県だけで一千箇所以上にのぼった。特に、寒さの厳しい折、高齢者にとって避難所生活は苛酷であり、多くの方が肺炎等で亡くなったという。このほかにも、復旧工事中の事故や道路破損による交通事故など、

震災の間接的被害も含めると最終的な死者の数は六千人を超えるものと思われる。仮設住宅も、もとが過密地帯であったので、被害の大きかった都市内部ほど、設置数に限度があるという皮肉な結果になった。建設された範囲は西区や加古川といった郊外にまで及んだが、入居はかどっていないようだ。これも大都市における災害の典型例と言えよう。また、借家と大家とのトラブルも多く発生したが、これが下火になった現在、都市の再建を進めるなかで、今まで住んでいた人が、再び元の場所に住むことができるか、という大きな問題に直面しているはずである。このように、過密地帯である大都市で、特に土地・家屋に関わる問題は、その他の社会資本のように、ただなおせばよいというものではないので、今後かなりの時間がかかりそうだ。

交通は鉄道・道路とも阪神間の各所で軒並み寸断され、四月一日にJRが全通するまで、大阪と神戸とを直通する電車は一つもなかった。不通区間は代替バスによる振替輸送や、JRでは福知山線や播但線を使った迂回

路による輸送も行われた。しかし、バスは渋滞に巻き込まれ、JRの迂回ルートは大量輸送の能力をもたない単線の非電化区間で、いずれも従来の輸送力を確保できなかったのは言うまでもない。半年以上たった八月上旬現在、阪神間の鉄道はほぼ復旧したが、神戸新交通の一部区間では、なお不通が続いている。道路も、高架橋が倒壊・落橋した阪神高速神戸線・湾岸線、名神高速は通行止、その他一般国道も車線や車種的大幅規制が行われ、迂回路となった地域の生活道路では大渋滞が今でも一部続いている。道路の復旧は鉄道に比べ時間を要し、上記三高速道は現在も完全復旧を見ていない。最も被害が大きかった阪神高速神戸線の完全復旧には更に二年以上かかるという。

電気・ガス・上下水道・電話等の生活関連施設も完全復旧には四月いっぱいかった。

その他、埋立地・人工島の液状化も著しく、特に今まで安全とされてきたマサ土による人工島や埋立地で、液状化が発生したことが注目されている。マサ土とは真砂

土とも書き、花崗岩の風化によって生成された土砂のことで、粒径が不揃いである。一般的に粒径の不揃いな土地は、液状化しにくいといわれているのだが、今回そのマサ土による埋立地で液状化は発生してしまった。液状化した土砂は、埋立地や人工島の護岸を激しくたたき、周縁部の構造物（高速道路の橋脚や荷役用クレーンの土台など）の側方流動を引き起こし、結果的に高速道路の落橋やクレーンの倒壊を招いた。このため、神戸港はその機能がほとんどストップし、緊急物資の輸送は大阪・姫路の港で陸揚げされて、混雑する陸路を通らねばならなくなった。もちろん、日本第二の港が使用不能になることによる経済的ダメージの大きさは言うまでもない。これら、社会資本の被害総額一〇兆円を超す（日本の年間国家予算が約七〇兆円）といわれている。

また、直接の被害というわけではないが、六甲山地の小規模な崩壊も目につく。神戸大学が行った航空写真による調査では少なくとも三〇〇箇所以上の崩壊が確認されているという。御岳の麓が大規模に崩壊し、三〇人近

い人が生き埋めになるという被害を出した一九八三（昭和五八）年の長野県西部地震では、M六・八だったので、今回、六甲山地の大規模な崩壊が発生しなかったことは、不幸中の幸いであつた。しかし、この件に関しては今年起こらなかったからよかったという性質のものではない。特に雨期には今までの以上の警戒体制が必要とされるであろう。

なお、地震の被害等に関しては、各新聞社が出版した写真集、国土地理院発行の一万分の一震災地図、日経大阪PR企画出版部の航空写真、土木学会・建築学会の資料集等が書店で購入可能なので参考にされたい。

4. 断層は動いたか？

今回の地震では、先にも述べたが、日本の地震史上初めて震度七が記録された。その分布は、震央に近い淡路島北部および、神戸市から西宮市を経て宝塚市に至る六甲山南～東麓の幅約一kmという非常に細長い範囲であつた。震央から離れた地点での強震度の出現は、何度も言うように、従来から軟弱地盤に起因するものという考え

が一般的であったが、今回、震度七が適用された地帯は、最も地盤の軟弱な三角州帯や埋立地（最も浜側）ではなく、それよりもやや内陸側の、比較的しっかりした地盤の上（更新統の扇状地に相当する地帯）であった。なぜ、震央から二〇kmも三〇kmも離れた神戸や西宮で、最大震度の分布をみるようになったのか？ なぜ、その分布は最も地盤の軟弱な沿岸部ではなく、山麓部に集中したのか？

これに関し、早くから断層の運動によるものではないか、という議論が出されていた。六甲山地は今から二〇〇万年前、第四紀の始まった頃から隆起を始めたことが知られている。この隆起に関与したのが六甲山地に分布する断層群であり、第四紀以降に活動した履歴をもつこれらの断層を、活断層と呼ぶのである。特に山地南麓には布引・大月・五助橋・芦屋・甲陽といったAクラスの活断層（年平均隆起量 $10 \sim 10 \text{ mm}$ のオーダー）が集中しており、これらはみな北側の地塊を相対的に上昇させる逆断層である。このような活断層によって隆起した六

甲山地の南麓、神戸の市街地の地下に未知の断層があってもおかしくなく、その断層が今回活動したために、震度七の帯状分布を見ることがになった、というのか『断層説』の理論である。というのも、現在出回っている地質図はみな表層地質図で、基盤岩石が露出しているところでは、はっきり断層が描かれているが、大阪や神戸といった沖積地の地下の様子までは描かれていない。しかし、四〇年ほど前に大阪港で行われたボーリング調査で、六甲山地を構成している花崗岩は、地下一〇〇〇mに埋没していることが分かっている。六甲の麓から大阪港まで、わずか数kmのあいだに、花崗岩は地下でおよそ一〇〇〇mもの高度差をつくっている。この高度差が、大阪平野の地下に埋もれている未知の断層の仕業によるものであることは、ほぼ間違いないであろう。神戸の市街地の地下に断層があるという考えも、このあたりから導かれた議論なのである。また、過去に発生した内陸直下型の大地震でも、最大震度の分布は今回と同じく帯状になり、それが地震を引き起こした断層に沿うものであることが

経験的に知られている。ただ、仮に神戸市の市街地の地下に未知の断層があったとして、それが本当に動いたかどうかは疑問である。

この点に関して、京都大学防災研究所が出した、今回の地震に関する破壊過程に関するモデルがある。破壊とは断層運動そのものであると思っていただいてよい。それによると、まず最初の破壊が明石海峡付近（震源）で発生し、直ちに南北に破壊が伝播した。引き続き第二・第三の破壊が神戸市側で発生し、これらの破壊が約一秒ほどで完了したという。私は地震の専門家ではないので、地震計の記録を解析する技術は知らないが、最初の破壊というのが野島断層の活動に相当すると思われる。さらに、神戸市側で破壊が発生したということは、六甲山中もしくはその近辺に存在する断層のどれかが活動したことを示すものであり、断層が動いたことを支持する有力な手掛かりとなっている。また、少なくとも今回の地震では、六甲山中の太月断層や五助橋断層といった既知の断層は、ほとんど活動していないことがほぼ確実現

されている（もしこれらの断層が動いていれば、六甲山中をくりぬいて造られた新幹線六甲トンネルや北神急行のトンネルなどに大きな被害が出ているはずであるが、今回そのような報告はなかった）、そうすると六甲山地の南側に、もうひとつ未知の断層があり、これが動いたのではないかという話になってくるのである。

ただ、このモデルもあくまで地震記象から解析して得られたものであり、“エネルギー放出量から換算すれば、このあたりでこの程度の破壊が起こった”ということをしていっているだけで、実際の破壊形態（横ずれなのか縦ずれなのか、一本の断層が動いたのか複数動いたのか、破壊は地表に達したのか達しなかったのか、といったようなこと）までは言及しない。

このような間接的な手掛かりだけでは、断定的なことは何も言えない。明らかに断層と分かる地表面の変形は、淡路島では野島断層に相当すると思われる地表面の食い違いを認めたが、神戸市には認められない。

この点に関して、次のように考える人もいる。断層と

は、岩盤が圧力に耐え切れなくなつて脆性的に破壊することによつて形成されるもので、その破壊の衝撃が地震になるわけだが、断層運動による地下の岩盤の食い違いが、必ずしも地表面にまで到達しないという点である。

つまり、大阪や神戸といった平野は、先には述べたとおり、基盤の岩石の上に沖積層や洪積層と呼ばれる、厚い未固結の土砂層が覆っている。地下の岩盤の食い違いをこれら未固結層が地表まで伝えなければ、野島断層ように明確な断層として認識できない。現在も続いている余震を考えてもらいたい。余震も地震であるからには地下で岩盤の破壊が確実に発生しているのだが、破壊の程度が小さいので、余震が起こるたびに、いちいち地表面に明確な地形の変化は表れない。同様に、神戸の地下で未知の断層は動いた（岩盤が破壊された）が、その破壊が地表面に伝わってこなかっただけではないかというのである。もちろん、今回のようなM7を超える大地震においてでも、食い違いが地表面に表れないことがあるかどうかは分からない。

いずれにしても、未知の断層の有無にかかわらず、断層が動いたかどうかを断言できる決定的な資料はないわけだ、これ以上議論は進まない。更に、断層が動いたことと、震度七が出現したことを関連づけることは、より困難な問題である。これらの解明のために、今後、より一層の調査研究が行われることを期待する。そして、願わくば、それらのデータは極力公開してもらいたい。

5. 今後のことに関して

「近畿地方が地震の活動期に入った」というフレーズを地震発生当初よく耳にした。これが事実であるかどうかは、将来、実際に地震が起こった時に初めて分かることであるが、根拠となっている過去の事例を私も確かめるべく、理科年表を繙いた。理科年表には有史以来のM五を超えるような地震（古地震に関しては推定値）を拾つてあるが、私はその中から一八世紀以降に発生した近畿地方を震源とする地震をピックアップしてみた。冗長とは思うが、それらの発生日時（西暦）・規模・主被害の場所もしくは被害地域の分かる地震名を一覧する。

一七〇七・一〇・二八	M八・四	五畿七道 「宝永地震」
一七〇八・二・一三		紀伊・伊勢・京都
一七五一・三・二六	M五・五・六	京都
一八〇二・一一・一八	M六・五・七	畿内・名古屋
一八一九・八・二	M七・四	伊勢・美濃・近江
一八三〇・八・一九	M六・五	京都
一八五四・七・九	M七・四	伊賀・伊勢・大和
〃 一二・二四	M八・四	「安政南海地震」
一八五八・四・九		丹後宮津
〃	八・二四	田辺
一八六四・三・六	M六・四	播磨・丹波
一八九九・三・七	M七・〇	紀伊半島南東部
一九〇九・八・一四	M六・八	「姉川地震」
一九一六・一一・二六	M六・一	神戸
一九二五・五・二三	M六・八	「北但馬地震」
一九二七・三・七	M七・三	「北丹後地震」
一九三六・二・二一	M六・四	「河内大和地震」

一九三八・一・一二 M六・八 田辺湾沖

一九四六・一二・二一 M八・〇 「南海道地震」

一九四八・六・一五 M六・七 田辺市付近

一九五二・七・一八 M六・八 「吉野地震」

一九九五・一・一七 M七・二 「兵庫県南部地震」

これを見る限り、近畿地方で発生する地震に規則性は認められそうにない。おそらく、この百数十年ほどの傾向から、上記のような説が出てきたのであろう。つまり、一八六四年の地震以降、三五年間のブランクをおいて、一八九九年以降再び地震が頻発し、南海道地震に至った。その後、一九五二年の地震から四三年のブランクをおいて、今回の地震が発生した。だから、これから再び地震が頻発するだろう、という考え方だと思う。長い地質時代の中で、百年ほどの傾向から一般的な傾向を導くのは無理があろう。また、プレート同士のぶつかりあいいう、地球規模の現象に対して、近畿とか中部とかいった細かな地域区分に、どれほどの意味があるのかも分からない。ただ、ここで南海トラフ付近が震源とみられる地震をビ

ックアップしてみよう。この表より以前のものも付け加えると、一三六一年、一四九八年、一六〇五年、一七〇七年、一八五四年、一九四六年と、ほぼ一〇〇〜一五〇年の周期で、南海トラフ付近を震源とするM八クラスの巨大地震が発生し、津波を伴った被害をもたらししている。今回の兵庫県南部地震が、今後起こるどのような地質的現象を予言するのかは分からないが、確実に言えることは、今まで我々が盲目的に信じてきた「関東は百年、関西は千年」という大地震の周期に関する言い慣わしには、ほとんど意味がなかったということである。願わくば地震は起こってほしくないものだが、このような統計的確率からいえば、関西も安泰とは言えない。もうこれで千年は来ないだろうという発想で、復興の大義名分のもと、手荒な工事は禁物であるということのようだ。

最後に余震に関して。もう強い余震はこないかと、地震関係の人に聞いて、おそらくほとんどの人が来ないと断言することは避けるだろう。理由は第一に我々が予言者ではないということ。第二に本震のM七・二に比べ、

最大余震のM四・九はやや小さいような気がするということであろう。実際、最初の三ヵ月ほどは、M六程度の余震がくるのではと、心配された方も多くおられると思う。地震後半年以上たった今、余震の起こる確率はほとんどなくなったと言いたいのが、本震の一年後に最大余震を経験した例（一九八五年の日本海中部地震）もあるので、まだ可能性〇の断言は躊躇される。

その他、今度は有馬―高槻ラインが危ないとか、生駒が危ないといったような話を聞くが、全て予言者、占いの師の領域であって、実際どのようなえらい地震学者でも、「そういうこともあるかも知れませんが」と言うのが関の山である。不安を煽るようなことばかり書いたので、安心材料もひとつ。写真等で紹介された、野島断層上の淡路島平林地区の民家があるが、あれを見ると、断層が現れた部分は歪みが生じているが、あの神戸の家屋の倒壊状況からすれば、これが断層直上の建物か、と思うくらいしっかりと残っていることに驚かされる。過去に起こった、例えば伊豆大島近海地震の時などでも、断層直

上の家屋が、断層に沿ってずれている例はあったが、ぺしゃんこに倒壊している例はあまりなかったように思う。今回の神戸市～西宮市における震度七の分布も、断層が動いたことが直接の原因であると断定はされていない。断層をいたずらに危険視することもない、ということである。もちろん、断層上は地盤が軟弱で、仮に断層が動かなくとも周囲に比べて危険であることは言うまでもないが、だからといって断層の上なら確実に建物が倒壊するということも、言えそうにないのである。地震に對する危険地域の発見が今後の大きな課題になると思われるが、そのためには現在ほぼ未知の領域である。『地震波の挙動』というところで地震波は増幅されるのか』について、さらに研究が進められることが大切かと思う。

(河田 優)

二 授業再開過程

1. 高等学校の再開過程と入試対策

阪神・淡路大震災によって本校も臨時休校に追い込まれたわけであるが、授業の再開過程を説明しておこう。

一月一七日(火)、出勤できた職員によって中学校で会議がもたれ、一月二二日(土)まで休校することが決定された。

一月一九日(木)に一月二八日(土)まで休校することが決定された。

一月二五日(水)午後一時、中学校会議室ではば全員の教職員出席のもと緊急職員会議がもたれた。在校生関係の事柄を列挙すると、

① 一月三〇日(月)午後一時生徒登校

② 二月一日(水)より授業再開

一〇時予鈴で四〇分四時間授業

当分の間クラブ活動は禁止

③ 二月一〇日(金)の卒業式は三月二四日(金)に延期

④ 耐寒駆け足、耐寒登山は中止

⑤ 学年末考査は中止

⑥ 授業最終日、三月二日(水)

⑦ 終業式、三月二三日(木)

⑧ 登校困難な生徒は公認欠席

以上の八点が決定された事柄であるが、②の授業再開については、一月三〇日(月)の生徒の集合状況に影響されることが話し合われた。

③の卒業式については、大学の合否結果が出る前に実施したいという意見が強かったが、三月二四日(金)におちついた。なぜ二月一〇日(金)に実施しなかったかをつけ加えておく。

本校は卒業証書の印刷を神戸市東灘区の印刷所に依頼しており、あの一月一七日が納品の約束になっており、その後印刷所とは連絡が付かなかったこと、及び在校生の授業を一時間でも多く行いたかったことがあげられる。

⑤の学年末考査の中止については、試験をするよりも一時間でも多く授業をしたかったこと。甲陽生たる者試験があるなしに関わらず勉強するはずであるという教員

の思いの現れであった。

⑥については、三月三日まで授業をするというようなことも考えはしたが、交通事情の悪い中で無理をするよりも、休みは休みで十分休養をとり、新年度を迎えようと言うことで決着を見た。

一月三〇日(月)午後一時に一、二年生が登校、その日の欠席者は三二名であった。登校できない生徒に対して授業をどうするかということが話し合われるが名案は出ず、二月一日(水)授業の再開となった。一〇時始まりで午前中二時間午後二時間の五〇分授業四時間だけであった。この日の生徒の欠席は一八名であった。

約一ヶ月の間四時間授業を続けたが交通機関の復旧に伴い三月六日から四五分六時間授業を始め、四月からは五〇分六時間授業に切り替えた。ただし、一時間目の開始は九時二〇分で、午前中三時間午後三時間である。阪急電車が全線開通するまではこの時間帯で授業するのが限界のようで、震災前の状態に戻るのには二学期からになった。

次に高校入試について整理しておく。

試験日は兵庫県の私学の校長会で二月二六日と決定がなされた。それを受けて、本校は二月二六日(日)国語・数学、二月二七日(月)英語・理科とし、面接は中止する事を決定した。このことを受験生に連絡するために、朝日新聞の情報コーナー及び読売新聞の震災掲示板に試験日程の変更記事の掲載をしていただいた。これは本校五六回卒業の共同通信社記者栗野仁雄氏の助言であったことをつけ加えておく。

この入試日程であるが、近畿地区の他府県では二月一日(水)が入試日で、本校を志願している受験生も他府県の学校を受験し、入学手続きを取ってしまうのではないかとという危惧があった。蓋を開けてみると、出願者九四名、受験者七八名で、欠席者が例年になく多いのが気になった。

「募集人数約四〇名」と公表していたが、このような状況の下、本校を受験しているのであるから一人でも多く合格させてやりたいという気持ちから、四六名の合格

者を決定した。残念なことにその中の四名は入学を辞退した。そのうち二名は東京の私立高校、一名は国立大の付属高校へ入学が決まっていたとのこと、残る一名は下宿先に予定していた祖父宅が震災で全壊してしまったため、自宅から通学できる高校へ入学することであった。

この未曾有の大震災を乗り越えて見事合格した諸君の今後に大いに期待したい。またこの大震災によって本校のモットーは「授業を大切にする」ことであると、確認できたように思える。

(山下 正昭)

甲陽学院高等学校受験者のみなさんへ

◎入試日程を左記に書き換えます

一、出願期間 二月十三日(月)～二月十七日(金)

二、試験日 二月二十六日(日)、二十七日(月)

※両日とも十時集合

甲陽学院高等学校

TEL0798(73)3001
FAX0798(73)1559

『朝日新聞』1995.1.30

2. 高等学校の震災後の日程

一月一七日(火) 阪神大震災(五時四六分・震度七)、臨

時休校(二八日(土))

一九日(木) 職員・生徒安否確認(学校連絡網)

二五日(水) 中高合同職員会議(於中学校・一三時)

欠席一名(足負傷)

三〇日(月) 生徒登校 一三・〇〇登校 九二・〇%

出席 職員会議 一四・三〇

二月一日(水) 授業再開 一〇・〇〇始業、五〇分四限

(午前二限/午後二限)

自転車通学を許可、下校時に職員が監督。

育友会運営委員会(一、二年) 一三・三

○※

※学校方針説明、罹災生徒への見舞金等に

つき説明、また育友会委員会からホーム

ステイの申し出等もあり。

三日(金) 生徒被害調査開始

四日(土) 五〇分二限授業 以下毎土曜日

二二日(水) 職員会議 一五・〇〇

二六日(月) 入学考查第一日目(国語・数学)

二七日(月) 入学考查第二日目(英語・理科)

二八日(火) 合格判定会議 一一・〇〇、合格発表

一四・三〇

入学金・授業料減免、延期希望者申し出。

教頭面接(新入生)

三月一日(水) 中学入学考查のため休校

二日(木) 中学入学考查のため休校

三日(金) 休校・職員代休

四日(土) 合格者手続 一四・〇〇

六日(月) この日より四五分六限授業

七日(火) 全壊半壊による減免者には、入学金・一

期二期分授業料を免除する旨、法人・学

校決定。

八日(水) 職員会議 一五・〇〇

一〇日(金) 前理事長追悼式(於甲子園都ホテル)

一五日(水) 一二年成績報告

二〇(月) 進級判定会議 一五・五〇

二二(水) 授業最終日

二三(木) 終業式、新一年生受入れ 一四・〇〇

二四(金) 三年生卒業式 一一・〇〇

(重久 俊夫)

3. 中学校の再開過程と入試対策

震災直後から中村校長、山本事務長を中心に、職員の安否確認、及び担任による生徒の安否確認が行われるが、すぐには確認できない者も多く、また、各地域の被害状況も充分把握できない状態の中で、取り敢えず、週末までは臨時休校することとし、当初は問い合わせにもそのように応答していた。しかし、状況分析が進むにつれ、被害は予想をはるかに上回り、開校時期は未定、後日連絡という回答に変更した。

受験生からの問い合わせも多く、五校(灘・六甲・甲南・関学・甲陽)の校長話し合いにより、二月一日からの入学試験を一ヵ月繰り延べ、三月一日からとする旨発

表。また、本校は一月一二日に願書受付を締め切っているため、震災による出願期間の延期は行わないこととした。

現職員の全員無事は確認されるが、前理事長・辰馬龍雄氏の逝去が報じられ、また、一年C組奥野正弘君及びご両親の訃報や在校生の親族の悲報も伝えられ、暗澹たる気持ちで学校再開の糸口を模索する。

中学校校長室にて、中村校長、山田・石川両教頭、山下教務主任を中心に、連日善後策を協議する中、兵庫県私学校長会にて、中学入試日程が三月一日からと決定。それらを受けて、一月二五(水)一三時から中学会議室にて中高合同職員会議の開催し、そこで今後の日程を決めることとする。

職員会議において、一月三〇(月)一三時に登校可能な生徒を招集することとし、山下教務主任を通して新聞にて報道、また、各担任から可能なかぎり生徒へ電話連絡することにする。合同会議にて大枠を決定後、中学校教員の職員会議を校長室にて開催。

中学校職員会議にて決定確認された事項は以下の通り。

- ① 授業再開は二月一日(水)から、一〇時五分配朝礼、一〇時一〇分から第一限開始、五〇分四限授業。
- ② クラブは当分の間禁止。
- ③ 学年末考査は中止。
- ④ 三年生の実力考査は中止。
- ⑤ 授業最終日は三月二日(水)。
- ⑥ 終業・卒業・離任式は三月二三日(木)。
- ⑦ 登校困難な生徒は公認欠席扱い。
- ⑧ 三年生スキー訓練については、実施の可否・時期を含めて三年学年団預りとする。
- ⑨ 中学入試について
三月一日(水)九時三〇分、講堂集合。
三月二日(金)一〇時、講堂集合。
考査番号の郵送を中止し、講堂にて直接手渡し。
面接は中止。
入学手続きは三月一日(土)。

詳細は二月一〇日(金)付で、志願者に郵送にて連絡。

なお、中学入試日変更についても、新聞報道にて発表することにする。

⑩ 遠隔地に避難している者で、その地の中学に通学することを希望する者には、特例として、許可することとし、復学も認めることとする。

一月三〇日(月)一三時、生徒登校。四一一名登校。これは全校生の八三・七％に当たる。

教室で朝礼。全校放送にて校長挨拶。奥野君の死を悼み、黙祷をささげる。生徒一旦教室にて待機させ、職員会議。一〇時ならば殆どの生徒が登校可能であることが確認されたため、二月一日から予定通り授業再開を決定。終礼時、時間割等諸連絡。通学には、自転車通学も特別に認めることとし、また、制服を紛失した者には服装にある程度の自由度を与えることとする。

本校の体育館は、一月一七日から避難所となっていたが、避難されている方々のご好意により、柔・剣道場のみを避難所として利用することとなり、アリーナは使用

可能となる。

二月一日当初は月曜から土曜まで、すべて四限授業を組んでいたが、中学生の体力を考慮し、また地域・家庭での復興の手伝いも重要な教育活動の一貫と考え、水曜と土曜を休日とする週四日制に変更した。これに伴う授業の補填は新年度になってからとし、終業式等を延期したりするような早期の回復は考えないことにした。

二月二日(木)、育友会役員会を招集。学校側のこのような考え方を伝えるとともに、登校できない生徒には、教材を郵送し、学業に支障をきたさないよう配慮すること、学校再開への理解を求めた。席上、下宿等の斡旋を学校に求める声もあったが、寧ろ育友会の相互連絡に依存したい旨、了承を願った。

生徒の出席率は、従来に比べると低かったが、交通機関のことも考え合わせると、よく頑張っていたと思う。

二月中旬には、各担任を中心に、登校が困難な生徒を訪問し、激励するとともに実情把握に努めた。やがて、避難していた者も徐々に戻ってくるようになり、欠席者数

は漸減していった。

三年生のスキー訓練は、時期を三月一五日(木)～一九日(日)にずらして実施。交通機関は往復ともバス利用に変更した(帰りは夜行)。スキーには全員が参加。結果的にみて、意義深いものであったと考えられる。

入試に向けての準備は二月初旬より再開。甲子園都ホテルが入試の際の宿泊を了解してくれたので、二月一日付の志願者宛連絡にそのことを付記。かなりの利用者があったとき、志願者宛の連絡と同じ内容を、同日付で、各在籍小学校長宛にも郵送。変更通知の徹底をはかる。

三月一日(木)には四二七名の志願者中三九五名が受験。震災によるダメージは各人各様にあったと思うが、それを乗り越えて、例年と変わることはない出席率で入試を迎えることができた。ガス・水道の復旧をみないままの入試で、特にトイレのことが大きい問題であったが、受験生及び保護者の協力で、たいしたトラブルもなく、入試を終えることができた。一六五名の合格者のうち、辞退

者二名。追加合格二名。

四日(土) 震災のため、入学時納入金の振込みが困難な者に対して保護者面談を行い、事情を聴取。九名来校。

取り敢えず振込み延期の形をとり、減免等の措置については後日連絡することとする(後日、措置内容として入学金・施設設備資金はともに半額、授業料は一期・二期免除とすることに決定)。

一日(土) 一三時から入学手続き(帰宅時の混雑を考え、当初予定より一時間繰り上げた)。物品販売は、従来のように西校舎の管理棟を利用できないため、体育館のアリーナのみで行う。少し混雑したが、五時過ぎにはほぼ手続き完了。

(大川 貴史)

甲陽学院中学校受験者のみなさんへ

◎入試日程を左記に変更いたします

一、試験日 三月一日(水) 九時三十分集合
三月二日(木) 十時集合

二、出願者には二月十日付けで詳しい案内を発送します
※二月十日を過ぎても届かない場合は
学校へ連絡してください

甲陽学院中学校
TEL0798(33)5012
FAX0798(33)6010

『朝日新聞』1995.1.29

4. 中学校の震災後の日程

一月一七日(火) 阪神大震災(五時四六分・震度七)、臨時休校(二八日(土))

時休校(二八日(土))

一九日(木) 職員・生徒安否確認(学校連絡網)

二五日(水) 中高合同職員会議(於中学校・一三時) 欠席一名(足負傷)

三〇日(月) 生徒登校 一四・〇〇登校 八三・九〇出席

出席

二月一日(水) 授業再開 一〇・〇〇始業、五〇分四限(午前二限/午後二限)

(午前二限/午後二限)

以後水曜・土曜は休校、通学不可能生徒は通信添削(郵送)

二日(木) 育友会運営委員会 一三・三〇※

※学校方針説明、罹災生徒への見舞金等につき説明、また育友会委員会からホーム

ステイの申し出等もあり。

三日(金) 生徒被害調査開始

四日(土) 休校 以下毎土曜日

七日(火) この日のみ、一〇・二五始業 四五分四

限授業 阪神電車事故のため

一〇日(金) 入試日程につき志願者に通知発送

一三日(月) 校内で一斉テスト

二一日(火) 職員会議 一五・〇〇

二七日(月) 四限目大掃除

二八日(火) 入学考查準備・授業なし

三月 一日(水) 入学考查第一日目

二日(木) 入学考查第二日目

三日(金) 合格判定会議、合格発表 一六・〇〇(全

員手続完了)

六日(月) 校務運営委員会 一五・〇〇〜一七・三

〇

七日(火) 全壊半壊による減免者には、入学金・一

期二期分授業料を免除する旨、法人・学

校決定。

職員会議 一五・〇〇

一〇日(金) 前理事長追悼式(於甲子園都ホテル)

一日(土) 入学手続 一三・〇〇 二名辞退(補充)

一五日(水) 三年スキー訓練出発(一九日(日))

二〇日(月) 三年生代休

二二日(水) 授業最終日

進級判定会議 一五・〇〇 大掃除 三

年実力テスト(六〇分三限)

二三日(水) 終業式

三年生卒業式 離任式(奥田・小倉氏)

(谷口 紀之)

三 生徒の安否確認

1. 中学校一学年

一月一七日の震災以降、第一学年では各組担任を中心に生徒の安否確認に入ったが、電話の不通、居住場所の変更などから、学年生徒全員の第一次の状況把握は一月二〇日までかかった。

中でも、一年C組の奥野正弘君とご両親の計報に接したことは痛恨きわまりない。姉上のご存命に一縷の光を見る思いであったが、どうお慰めすべきか、言葉がなかった。その後、姉上が何度か来校され、奥野君のさまざまな挿話を伺うにつけても、失った人の大きさが身にしみる思いだった。三月四日、神戸市祥福寺での告別式に、全校あげてお別れをさせていただいた。

第一次の状況把握以降も、罹災家庭の転居、連絡先の変更が相次ぎ、学校連絡網は何度も刷り直しを必要とした。遠隔の他府県に一時仮寓する家庭もあり、その主なものを挙げると、東京一、千葉二、埼玉一、神奈川一、愛知一、岡山二、徳島一、島根一となり、その地の中学

校に一時在籍した者二（千葉、島根）となっている。

（池田 辰彦）

2. 中学校二学年

一月一七日（火）午前五時四十六分、平成七年兵庫県南部地震発生。北畑は午前八時すぎ学校に到着する。刻々と被害が大きくなってゆくことを知る。その後、帰宅後、生徒からのさまざまな連絡が入る。大阪地区の生徒からは授業の予定についての問い合わせ。西宮、芦屋、神戸地区からは安全であるとの連絡で精一杯。学年別・クラス毎に生徒の安否確認に一日より入る。公衆電話しかつながらず、かなり手間どる。結局は生徒の家まで訪問して安否を確認することもあった。

二三日（月）に全員無事であることを確認。その時点で、家屋全壊の者四名、半壊の者一三名であった。その後全半壊の数は増えてゆくこととなる。

（北畑 健一）

3. 中学校三学年

担任が手分けをして早朝や深夜などに電話をかけた。避難所にいた生徒がいたため、全員の確認には四日間を要した。

(石原 佑)

4. 高等学校一学年

一七日の大震災直後は、各クラス担任の自宅に何人かの生徒本人や、保護者から無事である旨の連絡が入った。また、学校の事務室の方に連絡を入れたケースも多かった。その過程で、第一学年の生徒の父親が一名亡くなったという悲報が伝えられた。二〇日過ぎには、どのクラスでも大半の生徒の安否確認ができたのだが、数人はどうしても連絡がつかず、家庭訪問を行ったり、保証人宅に連絡したり、友人関係を通じたり、いろいろな工夫して全員の安否を確認した。ともかく、大震災後しばらくは電話がつかないケースが多く、最後の一人の安否確認を終えるまでの時間を随分長く感じた。

(山口 治男)

5. 高等学校二学年

一月一七日の地震発生後混乱する中でまず各担任がとりかかったことは生徒の安否の確認作業であった。これが大変困難な作業であった。なぜなら被災地域の電話が殆んど、通話不能になっていたため生徒連絡網は役に立たず、東は豊中から西は明石までは完全に連絡が取れなかった。それでもたまに大阪方面に公衆電話が通じるころがあり、その生徒から何人かの無事を聞いて胸をなでおろすことが度々あった。こんな状態の中で少しずつ集ってきた情報で、自宅が全半壊したため知り合いの家へ避難した生徒が多数あった。また父親や母親を亡くしたという悲報もあった。なんとか二年生全員の無事を確認できたのは一月二五日であった。

(大安 正美)

6. 高等学校三学年

大震災の日から、各クラス担任の自宅に自分も含めて友達が無事であることを知らせる連絡が何人かの生徒か

ら入った。なかなかつながらない電話にいらだつ日々であつた。第三学年は、出願の為の調査書を渡さなければならぬ時期であつたので、その連絡により無事を確認し、ほとんどの生徒に学校で直接顔を見て調査書を手渡

すことで状況の確認ができた。二五日で調査書をほとんど渡し終え、全員の無事も確認できた。事務室の方々の多大な協力によつた安否の確認であつた。

(妙島 秋男)

	本日の 出席	10時 可能	11時 可能	不可能	1/30 (月) 14:00
3A	43	34	8	1	山田教頭先生 本日の調査結果です。 (本日の出席者12) ついでのみ
B	47	42	4	1	
C	48	47	1	0	
小計	(138)	(123)	(13)	(2)	
2	53	53	0	0	
B	45	45	0	0	
C	43	35	8	0	
小計	(141)	(123)	(8)	(0)	
1A	44	44	0	0	
B	39	38	1	0	
C	49	41	8	0	
小計	(132)	(123)	(9)	(0)	
総計	411	379	30	2	
		(92.2%)			
		(99.5%)			

奈良県立 甲陽学院中学校

兵庫県総務部教育課

私学第1係 様

学校法人 辰馬育英会

(高等学校事務)

被災に因る転学者 避難者等調査

H07.02.08.

学 校 名	転学者・転学希望者		避 難 者 数		備 考
甲陽学院高等学校	1 年	0 名	1 年	2 9 名	※ 3 年 生 に つ い て は 安 否 は 確 認 済 み で あ る が 登 校 し て い な い た め 、 確 認 出 来 て い な い 。 (郵 便 連 絡 等 で 確 認 作 業 中)
	2 年	0 名	2 年	4 6 名	
	3 年	0 名	3 年	不 明	
	合 計	0 名	合 計	7 5 名	
甲陽学院中学校	1 年	3 名	1 年	4 0 名	転 学 者 : 千 蔵 中 但 し、全 員 転 学 希 望
	2 年	0 名	2 年	3 5 名	
	3 年	0 名	3 年	2 3 名	
	合 計	3 名	合 計	9 8 名	

※ 避難者数には通学のためのホームステイ(友人宅)生徒を含む。

四 甲陽学院の被害状況

1. 学校の物的被害

① 高等学校

南校舎 壁(亀裂) ガラス(破損)

講堂 記念室壁(亀裂) 倉庫壁(亀裂) 映写室

壁(亀裂) 一階ボーチ床タイル(亀裂・隆

起)

北校舎 壁(亀裂) 通路(亀裂) テラス床(亀裂)

体育館/食堂棟 厨房・洗面所壁(亀裂) 体育館天井

(剥落・亀裂) 柔道場非常口扉(不調)

体育準備室壁(亀裂) ボイラー室壁(亀裂

・沈下・隙間) 食堂東側溝・土間(沈下)

体育館南側花壇・土間排水溝(亀裂・崩壊・

沈下) 卓球場階段土間(沈下)

倉庫棟 通路フェンス足元コンクリート掛け

グラウンド等 グラウンド防球フェンスコンクリート柱(陥

没) テニスコート 溜池(全水量流出)

備品等 図書室書架 図書室書庫書棚 ウォーター

クーラー (生物) インキュベーター
顕微鏡対物レンズ パソコン (化学)
スチール上部棚 自動上皿天秤 電磁実験
用電子レンジ 純水製造装置

② 中学校

東教室棟 エキスパンション (建物移動・沈下) 外壁

タイル(亀裂) 天井仕上げ材(落下) 内

壁(亀裂) 砂利舗装(亀裂・不陸) 自転

車置場(傾斜) 外周花壇・生け垣(破損・

沈下・通り不整) インターロッキングプロ

ック・縁石(不陸・破損・通り不整) 車止

め(不陸・傾斜・陥没) 浸透式会所(傾斜

・ひずみ・陥没) 側溝(傾斜・陥没・通り

不整) 植栽(沈下・亀裂・陥没) 門扉(隙

間不整・錠不調) 西面通用口(ひずみ・傾

斜)

体育館 内壁(ひずみ) プール出入口(開閉不調・

ひずみ) 東通路(不陸・陥没・隆起・沈下)

北通路(沈下・陥没) 西通路(沈下・陥没)

ポーチ・踏石巾木(沈下・陥没)

管理棟 屋根瓦(破損・ひずみ・通り不整) 外壁タイル(剥離・破損・亀裂) 廊下教室・床(隆起・沈下・剥離) 建物東(沈下) 壁(亀裂) エキスパンション(建物移動・沈下)

トイレ(亀裂)

講堂 外壁タイル(剥離・破損・亀裂) ホール・

外階段(亀裂) 内部壁(クロス亀裂) 天井照明(落下・破損) 外部壁(剥離・亀裂)

芸術棟 外壁(隆起) エキスパンション(建物移動・沈下) 空調室機械台(傾斜・沈下) 腰壁(亀裂・崩壊・剥落) 内壁(亀裂) 床

(亀裂)

プール アルミプール本体(沈下・破損) プールサイド(沈下・破損・亀裂・剥落) 機械室・洗眼場(傾斜・破損・亀裂・沈下) 給排水

バルブ会所(破損)

西校舎 玉石腰壁(破損・亀裂・傾斜) 西門(開閉不調・土間亀裂・隆起) 北門(傾斜・土間亀裂・腰剥落) 東門(傾斜・土間破損)

通路(亀裂・隆起)

食堂棟 内壁(亀裂) サッシ(一部開閉不調) 外壁(亀裂)

壁(亀裂)

グランド バックネット・円柱・ブロック塀(傾斜・沈下・破損) テニスコート(亀裂) 砂場(液化による泥土隆起) 外周(沈下・不陸・通り不整) 外周側溝(沈下・通り不整・目地亀裂・剥離・泥土) グランド面(地割れ・隆起・沈下・液状化)

2. 特別教室等の被害状況証言

① 音楽(高校)

翌一月一八日に登校。音楽室は四階なので揺れも大きかっただろうと心配しながら上ってみたが、幸い多くの

29

ものを置いていないので被害はわずかであった。しかしながら三〇〇kgを超す重量のグラインドピアノが一〇cmも移動しており、揺れの大きさを物語っていた。研究室に入ろうとすると、入口付近の本棚が倒れドアが十分に開かず、身体をこじ入れてみると、本や楽譜が一面に飛び散り、奥の方へは入ってゆけず、ゆっくり気持ちちが落ちてから片付けようと、その日はそのまま放置。

一月三〇日の登校日より少しずつ復元作業に入り、本棚を起こしてみると、スチール製だがひずみもそれほど大きくなく、使用可。本、楽譜・CDと重いものから順に下の方から整理。本棚に押されたカセットテープ整理庫が倒れ、それがキーボードの鍵盤上に落ちており、取り除いてみると五本の鍵盤に被害。アップライトピアノ・オルガンは表面にキズがついた程度。オーディオセッとは接続を全部取りはずし、後日よぐれを取り、接続しなおしテストしてみたところレコードプレーヤーも含めてすべて無事。レコード・CDも被害なし。

あの大きな地震にもかかわらず、ほんの少しの被害で

すみ、二月一日からの授業は何の不自由もなく再開することが出来た。

(松井 義知)

② 図書室(中学校)

木製の開架書棚は倒壊し、中にあった数千冊の本はすべて床に散乱、また、資料展示ケースも倒壊、ガラスがあたりに飛び散っていた。床にはかなりの量の水がこぼれていた。この水は、屋上にある冷暖房機器の冷却水が漏れたものと考えられているが、天井に水漏れのシミ跡もなく、漏水箇所を特定できないでいる。AV機器や図書カウンター、机等は被害を免れた。書庫内部は、一部署本の散乱も見られたが、ハンドラックの書架に異常はなく、被害なしといつてよい。

開架図書は、池田・岡本両先生の素早い対応で、漏水の広がりをも最小限に食い止めることができ、書籍・資料の殆どを再利用可能な状態に保つことができた。

倒壊した書棚は、コクヨ株式会社の努力で、一月中旬に

復元した。散乱した本は一旦机の上に整理し、二月に入ってから、約半月かけて司書の武田さんが書棚に戻された。

資料展示ケースは、四月上旬、コクヨ株式会社が持ち帰り修理、四月下旬に納品。五月現在、図書館はほぼ完全に旧に復している。

(大川 貴史)

③ 化学（中学校）

(一) 化学実験室

建物の躯体そのものには被害がなかったため、実験台や床などに歪みを生じることなく、配管等にも亀裂が入らなかったため、補修の必要はなかった。

また、新校舎に移転する際、器具・薬品棚をすべて壁に固定したため、倒壊した備品は皆無であった。但し、日常の実験で使うガラス器具（ビーカー・フラスコ・メスシリンダー等）は、棚から飛び出し、その多くを破損した。高所にある棚は施設していたため、その中に保管

していた器具で破損したものはなかった。また、キャスター付のアングル棚に載せておいた試験管等是一个も割れず、地震の揺れをキャスターで吸収していたことが伺われる。

(二) 化学準備室

実験室と同じく、壁に固定していた棚は無事であったが、部屋の中央に置いてあった器具棚と書類書籍整理庫はすべて倒れてしまった。そのため、最初部屋の扉を開けた瞬間は、足の踏み場もない、きわめて悲惨な状態に思われた。しかし、幸い器具棚は壁にもたれかかるような状態でとどまったため、器具の破損はアルコーランブのような消耗品にとどまり、最小限に抑えることができた。兵庫建設の方を中心に、取り敢えず元の状態に積み直してもらったが、器具棚は5cmほど西に移動しており、地震の際の縦揺れで空中に浮かんだものと思われる。地震規模の大きさを物語っている。棚そのものは再利用可能で、四月六日に納入業者（ダルトン）が割れたガラス戸四枚と棧一本を取り替えた上、床と壁側の棚とに固

定、現在既に使用している。書類整理庫の方は、元の状態に積み直してあるが、大きく変形したものが多く、五月現在で引戸を入れずに使用しているものが四体あり、一部の書籍は今も整理庫に戻せない状態である。その他、受付カウンターにもヒビ割れが生じ、事務机一脚も倒れてきた整理庫のために天板に穴があいた。

しかし、我々を安堵させてくれたのは、瓶の破損した薬品同士の反応が全くなかったことである。毒性の強い薬品は金庫に保管しており無事、引火性の高い薬品は冷蔵庫の中で無事、劇薬庫は施錠してあるため、中で倒れたものも一、二本あったが、破損はなし、有機系の液体試薬の瓶も一切割れなかった。割れた瓶は三本あったが、いずれも毒性のない無機試薬であった。高圧ボンベも支持台ごと倒れたが、バルブ部分が無事であったため、事なきを得た。また、測定室の機器も測定台から落下したものはなく、使用に当たっては若干の調整を必要とするも、使用不能に陥ったものはない。

(三) 階段教室

化学準備室に隣接する階段教室には、視聴覚設備や展示ケースがあるが、アンプの収納庫が少し移動した程度で、これらに被害は出ていない。展示ケースは、人間でも倒せる程度のものであるが、無事であった。前述の準備室の棚が東西方向であるのに対し、南北方向に設置してあったことが幸いしたのかもしれない。

天井近くまでの高さのある本棚二つが共に倒れた。図鑑などかなり重い本がぎっしり置かれているので簡単には倒れないはずであるが、完全に倒れ床に本が散乱した。本棚のアンクルは一部ゆがみ、多くの本は破損した。アンクルについてはかなづちでたたいて曲った所を元通りにし、本についてはセロテープで修復を行った。

コンピューター台・ロッカー等場所が大きく移動した。コンピューター(PC9800M)は元通りの場所に戻した後、スイッチをいれたがうまく作動しなかった。インキペーターも大きく場所を移動し壁にぶつかって停止した模様、クーラーがうまく作動しなくなった。標本室のホルマリン標本だが、ほとんどが転倒してガラス

ビンが割れ、ホルマリンがこぼれて床に広がった。地震三日後より片付けを開始したが、強力な臭いのためはかどらず、最後は生物部の助けをかりて授業開始日の前には何とか片付けた。臭いは階下まで拡がった。

(大川 貴史)

④ 生物(中学校)

一月一七日午前八時、地震の状況を見に中学校へ行く。水浸しの光庭を経て生物準備室にはいると、やはりかなりの量の水がスプリンクラー(の誤動作?)によってばらまかれていた。準備室は入って左側に机とコンピュータの置かれた机があるのだが、中央に置かれた本棚が二つ、その上に倒れかかっていた。上の棚にあった本はほとんどがばらまかれ、その上、上からの洪水によってかなりの本、特に雑誌がダメージを受けた。本棚の扉のガラスは割れて飛び散っており、そのことと倒れた棚の重さから、その日に持ち上げることは断念した。一人ではとても手をつける気にすらならない状態であった

が、その何日か後にたまたま来ておられた池田先生と岡本先生に勇気づけられかつ助けていただいてようやく書棚の上半分を起こしガラスの整理をすることが出来た。薬品庫では、低温用の薬品庫が前方に倒れ、古い大きい木製の棚の横の一部分が割れていたが、幸い薬品が割れたり、異臭が出たりということにはならなかった。もともと生物に使う薬品であるから、そうたいした危険物はないのである。古い方の薬品棚はこれはかなり年代物で修理をするよりは、徐々に新品に変えていった方がよいと思う。低温用の薬品庫の方はまったく無事であった。その他、顕微鏡や恒温器なども無事で、新しい校舎のおかげで、被害は本当に最小限のものであったと思う。次に最も気になった生物たちを飼育している生物実験室と飼育室、温室であるが、実験室の方は、水槽がいくつか下に落ちているのではないかという危惧をよそに三分の一度の水が揺れでこぼれただけで全く移動していなかった。ただし、その後何回かにわたって大量にこぼれた水の後始末をするのがたいへんであった。こういう

時、生徒諸君がいてくれたらと思ったのであるが、これは他の先生方もまったく同じ思いだったのではないでしょう。水は出ないので水槽の水の補充は出来ず、一七日は午後六時ごろまで停電していたので温度調節も循環も出来ず、寒さに耐えかねて熱帯魚たちが地震の犠牲になった。水がないのでハムスターやハツカナズミのために汲んできた水をやっていたのだが、私自身、しばらく実家に避難していたので、彼らにとっては何日も餌をもらえないことの方がこたえていたのではないだろうか。

(谷本 雅昭)

⑤ 音楽 (中学校)

(一) 音楽室

グランドピアノに調律等が必要。室内の机・椅子のほとんどが倒れ、インシュレータのしてあったグランドピアノが一mほど北側へ移動していた。

(二) 音楽部屋

アルトサキソフォン・フレンチホルン使用不能。中量

ラック・本棚が倒れ、楽譜・楽器が散乱。ハードケースに入れてあった楽器類に被害がなかった。

(三) 音楽倉庫

三六インチバスドラムのリムと胴に割れ (スタンドにゆがみ)。中量ラック三本が倒れ、バスドラムが下敷きとなったため、他の打楽器に異常はなかった。ラックに収納してあったアコーディオン二台 (演奏可能) 全てが床に落ちていた。

(四) 準備室

楽器収容用の三本のロッカーが倒れ、バスリコーダー・テナーリコーダーが散乱していたが、楽器類は全てケースにいられたため被害はなかった。

(五) 合奏室

合奏室入口の壁に、扉の取っ手の穴が空く。グランドピアノは、インシュレータをしていなかった。なので、音楽室のピアノほど音程に狂いはなかった。しかし2mほど北側に移動していた。

(有馬 博隆)

⑥ 校史資料室（中学校）

西校舎は一九四〇年に建築された木造であるため半壊状態となった。全体に東側へ傾斜し、体育館との接合部分は約二〇cm沈下して段差が生じた。廊下は床板が東西に引つ張られたため至る所に数センチの隙間が生じた（図版Ⅰ）。壁や天井には亀裂が走り（図版Ⅱ）極めて危険なため、修理が完了するまで西校舎は立ち入り禁止となった。校史資料室として使用している旧、応接室と校長室は、天井の周囲の隅が崩落しそうであった。資料が入っている西向きのロッカーはすべて倒れ、一部資料が四散していた。旧、職員室は床が一箇所破裂。修理後も貴重品倉庫の前の床がしだいに盛り上がり、扉の開閉が不可能となってしまった。

四月から本格的な復興工事が始まり、屋根は青いビニルシートで覆われた（図版Ⅲ）。工事が完了したのは一〇月の下旬であった。屋根は瓦ではなく軽い瓦風建材が用いられている。資料室の本格的整理は冬休みから

始まった。

西校舎の全面解体撤去案もあったが、とにかく第一棟が修理保存されたことは喜ばしい。震災に耐えたのである。すでに第二・第三棟と図書館は、震災一年前に撤去されていた。いかに頑丈に造られていたか、当時の解体作業員が驚嘆していたことが耳に残っている（図版Ⅳ）。釘もほとんど錆でいなくなった。学校法人が校舎の安全性に心していた証である。

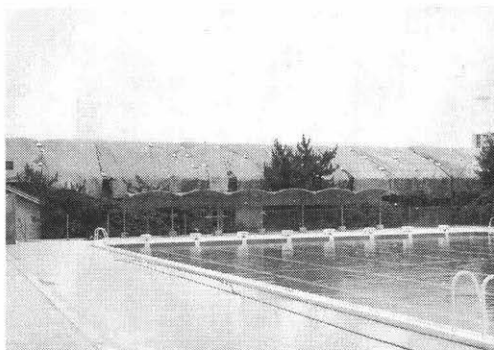
なお、正面玄関の時計は五時四七分を指したまま今も止まっている（本書カバー写真）。震災の証言者である。

（付記）図版Ⅰ～図版Ⅲは一九九五年五月二〇日に撮影。

図版Ⅳは一九九四年二月一三日に撮影。

（山内 英正）

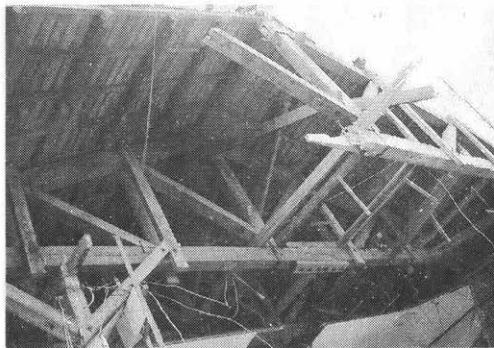
図版Ⅲ 修理中の西校舎▼



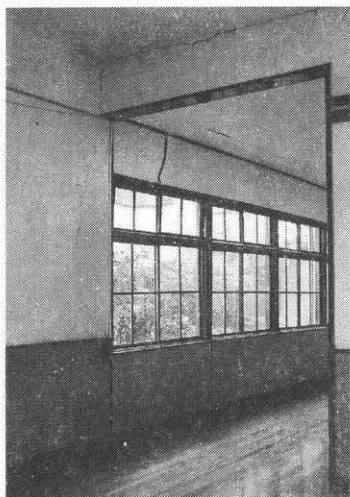
図版Ⅰ 廊下の隙間▶



図版Ⅳ 第2棟の屋根裏の構造▼



図版Ⅱ 壁の亀裂▶



3. 生徒・保護者の被害

死亡 中学一年C組 奥野正弘君。

保護者五名（父親三名 母親二名 ただし一親等のみ）。

家屋被害状況

中学		一年	二年	三年	計
全壊	半壊	12	14	12	38
7	12				29

高校		一年	二年	三年	計
全壊	半壊	9	13	7	29
19	11				47

（山本 雅彦）

4. 教職員の被害

死亡 評議員（前理事長）辰馬龍雄氏。

教職員・時間講師・事務職員七二名、パート職員二〇名、計九二名全員無事。

家屋被害状況

全壊 七名

半壊 一五名（含社宅）

全壊、半壊職員 白鹿グループ社宅に入居。旧社宅修理。

（山本 雅彦）

5. 教職員社宅の被害

・ 一九九五年一月一七日

午前五時四七分

上葭原社宅は大きな地鳴りと、家全体を卓球のピンポン玉のように跳ね上げられ目覚めた。部屋の家具類は柔道の大野哲哉の払腰や静利一郎の体落しの技の切れ味さながら、ものごとくに薙ぎ倒された。

後日、西宮市役所への災害通報受信票には屋根北側破損、外壁陣破れ多数、内壁破損落下、ブロック塀西全壊、北亀裂危険、門柱門扉倒壊。天井、柱、建具のずれひどく、家財の損失甚大と記している。

午前六時三〇分

上葭原社宅入居者、家族共全員無事確認。

- 一、山田 宏(高教頭・数) 二名無事(半壊)
 - 二、田村 眞哉(高・英) 二名〃(〃)
 - 三、大野 哲哉(中指導・体) 四名〃(〃)
 - 四、靜 利一郎(高総務・体) 二名〃(〃)
 - 五、松井 義知(高指導・芸) 四名〃(〃)
 - 六、今西 昭(高進学・社) 二名〃(〃)
 - 七、岡 隆章(中・体) 五名〃(〃)
 - 八、藤原 浩二(高・理) 四名〃(〃)
 - 九、上島 彰(高・体) 四名〃(一部損壊)
 - 一〇、新田 正昭(高・社) 三名〃(〃)
 - 一一、重久 俊夫(高・国) 二名〃(〃)
 - 一二、岡本 光司(中・国) 四名〃(〃)
 - 一三、岩見 誠之(高・体) 二名〃(半壊)
 - 一四、永井 浅三(中高・調理) 二名〃(〃)
- 社宅の被害は半壊一〇、一部損壊四、怪我人なし。

・一月一九日

午前一一時一五分

上葭原一番四号の三浦マンションAから出火、火災は翌日二〇日午前中も燃え続け完全鎮火は午後に入っていた。幸い社宅への延焼は免れたものの、上葭原一番社宅の八軒(大野・靜・松井・今西・岡・藤原・岩見・永井)が、白鹿グループ香炉園寮へ避難した。

・一月二〇日

香炉園寮へ避難した八名の内、岡・永井を除く六名は白鹿グループ南甲子園社宅(西宮市今津巽町六一三三)へ移転決定、岡は社宅テラスハウスへ移転決定。永井はしばらく管理人室に居住する。

南甲子園社宅、学校教職員入居者名簿

- | | | | |
|--------|-------|--------|-------|
| ① 一一二号 | 大野 哲哉 | ② 一一三号 | 松井 義知 |
| ③ 一一四号 | 今西 昭 | ④ 一一五号 | 靜 利一郎 |
| ⑤ 一一六号 | 岩見 誠之 | ⑥ 一一七号 | 藤原 浩二 |
| ⑦ 三二四号 | 大川 貴史 | ⑧ 三二五号 | 谷口 紀之 |
| ⑨ 三二六号 | 國嶋 晃 | ⑩ 三二三号 | 寺田 俊夫 |
| | 奥田 佳也 | | 山下 正昭 |

山下は一月二七日自宅へ転出。奥田は二月上旬に大阪府へ転出。谷口は二月一二日三田市へ転出。

一月一七日被災以来教職員の安全について、生徒の安全確認とともに最重要項目と考えた中村泰三校長の不眠不休の努力と白鹿グループの厚意により、迅速な住宅確保がなされた。

・三月一日

左記記録のように、辰馬本家酒造本社の多大な支援により職員住宅の補修復旧がおこなわれる。

あらためて、辰馬章夫社長、辰馬伸彦理事長はじめ、学校法人事務所の皆様に感謝申し上げます。

職員住宅補修について

一九九五・三・一六

文責 高校総務 静

一月一七日の阪神大震災で被害をうけた上葭原職員住宅も関係各位のご支援により、復興の槌音も高らかに補修がすすみ、三月二五日には第一陣として今西、静、藤原の三軒が上葭原に帰ってきます。第二陣は四月二〇日頃に岡、永井、岩見、大野、松井の五軒が職員住宅に復

帰の予定です。

辰馬本家酒造総務部次長高田氏、秘書室課長米田氏、学校法人事務局課長金沢氏、学校長、兵庫建設柏原氏、たいへんお世話になりました各氏に感謝申し上げます。

以下は、三月一日から三月一六日現在までの経過報告です。

一、上葭原木造住宅修繕申入れ

日時 三月一日（金）九・〇〇

場所 辰馬本家酒造本社

出席者 米田秘書室課長、中村校長、静総務 以上三名。

名。

内容 上葭原住宅の破損状況の報告と修繕について

次のように申入れをした。

米田氏より：被災前の現状復帰と、早急に現場視察の約束をもらう。

西四軒（山田、田村）

①北側に傾いている（一mに対して一八mm）

②風呂：浴槽と周囲タイルとの間に亀裂大、窓下に

隙間大

- ③便所：窓下に隙間、水道の状態不良
 - ④外壁：亀裂剥離（風呂、便所のところ被害大）
 - ⑤玄関：壁板はずれ
 - ⑥台所：天井板はずれ
 - ⑦全般に雨戸、襖の動き悪い（全然動かない所あり）
- 東八軒（岡、今西、永井、静、岩見、大野、藤原、松井）

- ①ブロック塀：西側全壊、北側亀裂危険
- ②門柱門扉：倒壊
- ③外壁：亀裂
- ④屋根：とゆの破損
- ⑤扉、窓：施錠不全、戸袋破損
- ⑥建具：ガラス障子破損、襖の動き悪い
- ⑦壁：壁土落下、ひび割れ
- ⑧天井板：玄関天井破損
- ⑨風呂場：桶と洗い場に隙間、タイル剥離（白蟻被害大）

⑩納屋：マンション倒壊による破損

ながし（四軒ステンレスに交換）
換気扇（不備の数軒に整備）
コンセント点検（電気、ガス）

二、現地視察調査

日時 三月一四日（火）一三・〇〇

場所 上葭原職員住宅一二軒

出席者 米田秘書室課長、大山氏、兵庫建設三名、静

総務 以上六名

内容 夙川土地事務所に集合、各住宅を細かくチェック（一三時～一五時）

兵庫建設事務所で補修内容、方法の検討

三／一〇に校長と約束した被災前の現状復帰

には、四月下旬までの工期延長が必要である

ことを確認（兵庫、柏原氏）

①本社に持ちかえり現状報告、緊急に方針決定する。

②本社総務と南甲子園社宅の延長使用許可調整をする。

③ 山田教頭宅については、他の社宅に仮避難し長期修理の必要ありと確認。

以上（米田課長）。

④ 東住宅八軒については時間差による移転もありうる（了承（静））。

三、南甲子園社宅退出移転時期について

日 時 三月一五日（水）午後 米田秘書室課長より

電話連絡。

① 中学寺田および、東上葭原住宅のうち今西、静、藤原の三軒は、三／二五（土）に退出移転完了。

② 三／二三（木）までに上記三軒は、補修を完了する。

③ 四／二〇（木）までに他の五軒も補修を完了する。

日 時 三月一六日（木）午後 米田秘書室課長より

電話連絡。

④ 三／二四（金）に南甲子園社宅の一室移転完了の

依頼。

（本社総務が研修で使用したい、との要請）

たまたま今西宅この日に移転予定あり承諾。

四、南甲子園社宅の鍵返却について

辰馬本家酒造総務部へ返却。

五、職員住宅関係連絡について

今回職員住宅補修に関連して雑多な情報が氾濫し、迷惑を受けました。今後このような、状況にならないよう次のような経路での連絡を厳守してください。

上葭原木造住宅

米田秘書室課長↑↓学校長・静総務↑↓各教職員

←

夙川土地事務所

上葭原テラスハウス

金沢課長↑↓学校長・静総務↑↓各教職員

←

夙川土地事務所

職員住宅に関する件は、必ず学校長または静高校総務までご連絡下さい。

夙川土地事務所からの直接情報収集及び、直接申入

れを厳禁します。

・五月二〇日

社宅補修完了。

《社宅関係カラー写真参照。撮影、藤原浩二・新田正昭・静利一郎》

(静利一郎)

五 生徒の通学に関する対応

1. 自転車通学

① 中学校

一九九四年度四月当初、学校から半径2km以上に居住する者(原則)について、四二名の自宅から学校までの自転車通学を許可した。

一九九五年二月一日、震災における交通状況による特別の処置として、一九九五年三月末日までの期間、自宅から学校までの自転車通学希望者全員に、臨時の自転車通学を許可した。なお、臨時の自転車駐輪場四七台分として、生物実験室北側通路を開放した。

(有馬 博隆)

② 高等学校

一月二五日(水)

中高合同職員会議において、阪急電鉄が不通のため高等学校の自転車通学を認めることが決定。通学指導の具体案を指導部で検討することになる。

一月三〇日(月)

自転車通学の手続き、諸注意等が決定し、生徒に伝達する(別紙参照)。

二月一日(水)

授業再開、約五〇名が自転車で登校する。

本日より下校時は毎日三、四名の職員が、ドライブインやまびこ付近、夙川短大テニスコート角、越木岩神社前、豊楽公園において通学指導を行う。

二月二四日(金)

阪急甲陽線の運転再開の発表があり、三月四日(土)より従来通り自転車通学を禁止することにする。

自転車通学を認めた期間は約一ヶ月であったが、指導部で最も配慮した点は生徒の安全についてであった。そのため下校時は一部の生徒を除いて通学経路を指定し、急な下り坂のところは自転車に乗らないよう注意し、職員も交替で下校指導に当たった。しかし、自転車を押すのを嫌うかなりの生徒が通学路を守らずに苦楽園バス停

方面に抜けていた。指導方法も再検討しなければならな
いと思われていたときに甲陽線の運転再開の発表があ
り、臨時的に認めていた自転車通学を従来通り禁止する
ことになった。自転車以外の通学方法では極端に不便で
あるという生徒については指導部に申し出るように連絡
したが、自転車通学を認めるだけの根拠のある生徒はい
なかった。

(箱田 光信)

自転車通学の注意と申請について

甲陽学院高等学校 生徒指導部

阪急電車の不通に伴い、臨時的に自転車通学を認めます。以下の注意事項を守り、所定の手続きをとったうえで、安全を第一に考えて通学してください。

1. 道路交通法に基づき、安全に走行すること。
2. 自転車の保安措置を確保し、自転車には名前を書いておくこと。(駅および学校周辺には絶対に放置しないこと。)
3. 路面の状況が悪いので、車体の点検を定期的に行うこと。
4. 学校において自転車は指定された場所に整理して置くこと。
5. 下校時は、建石原を夙川短大のテニスコートの角で右折し、越木岩神社の横をって苦楽園方面に下りること。(下校時は、この経路以外は通ってはならない。)
6. 安全な通学路を調べて届け出、通学には必ずその通学路を通ること。

* 自転車通学を希望する者は、右の許可願に必要事項を記入して提出すること。
(貸付場所の証明欄は、その所有者の署名捺印、もしくは、有料の駐輪場の場合は)
(領収証を貼付すること。)

1995年 月 日

甲陽学院高等学校長 中 村 泰 三 殿

自転車通学許可原

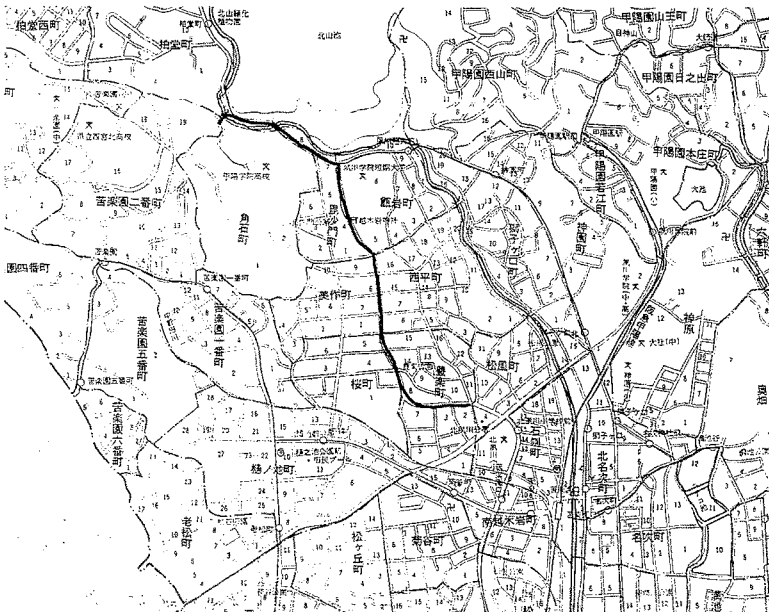
標記の件につき、申請致しますので許可願います。

第 学年 組 番 氏名 _____

保護者氏名 _____ 印 _____

住 所	〒 () -
保管場所	
保管証明	上記、保管場所であることを証明します。

〔学校までの自転車利用区間の地図〕 経路を赤で記入



2. ホームステイ

① 中学校

二月一日の学校再開直後、第一学年の保護者の方から、阪神大震災による家屋の損傷、交通機関の分断によって通学に困難をきたしている生徒について、他の生徒宅でのホームステイという方法が考えられないか、という提案をいただいた。二月二日の第一学年育友会運営委員会で採用され、二月三日、学年育友会から調査依頼文書が出され、希望する家庭二、提供を約束してくださった家庭五の申し出があった。

希望家庭の意向は、この時すぐではなく、今後授業が本格化した時になお交通事情が悪い場合をお願いしたい、ということであった。結局、この方式にもとづくホームステイは実施されなかった。二・三学期が弾力的な授業展開であったこと、四月以降JRなどの交通機関の復旧が早かったことなどによってである。しかし、この方式で備えていただいたことは、当時の通学困難な生徒たちにとってこの上ない励ましとなった。お力をいただい

た方々に改めてお礼を申し上げたい。

これとは別に、個々の家庭同士のつながりで、第一学年の明石市の生徒が同じクラス・部の芦屋市の生徒の家に約一か月半ホームステイした事例がある。ガスも水もない条件下でありながら進んでお世話くださったホームステイ先のご厚意は有難かった。この生徒たちにはともに助けあう貴重な機会となった。第二学年からも、部の友人同士でのホームステイ一例を聞いている。

(池田 辰彦)

② 高等学校

本校では二月一日より授業を再開したが、同日午後、高一と高二の育友会の役員の方々にも可能な限り集まっていた。その時点では、多くの交通機関が正常に動いていなかった。一年生の場合、特に神戸市営地下鉄などが不通のため、学年全体の一割に当る約二〇名が、通学に片道三時間以上(場合によっては約五時間)かかるという深刻な問題を抱えていたので、その解決策を考

えてみようという趣旨の会合だった。

学校内の施設に宿泊することや、学校付近のプロの下宿施設を探すこと、スクール・バスをチャーターすること、始業時間を遅らせることなど、さまざまな案が出されたが、それぞれに困難な点があり、結局、役員会での結論は、鉄道開通までの間のホームステイしか解決策はないのではないかというものだった。

私は早速、ホームステイを希望する家庭と、ホームステイを受け入れて下さる家庭の有無を調査することにして、各保護者に調査用紙を配布した。

いざホームステイを実施するにしても、問題点がいくつかあったのだが、幸い、各クラスで数名ずつの家庭が協力を申し出て下さった。後日わかったことだが、この調査を行う以前に、生徒同士で、すでに相談ができていて、友達の家ホームステイをしているケースも多かった。

結局何人の生徒が実際にホームステイをしたのか、正確な数字は把握できていないが、少なくとも二〇人以上

の生徒がどこかの家庭のお世話になったのは間違いない。中には一つの家庭で三名以上も預かって下さったケースもあった。また、ホームステイ先で病気になってしまい、先方に迷惑をかけてしまった生徒もいたようだったが、ともかく遠距離通学の生徒にとって、登下校にかかる時間とそれによる疲労が大幅に軽減されたことは確かである。

このホームステイに直接関係した生徒や家庭は、学年全体としては少数であったかもしれないが、これによって、まるで学年全体が一つの家族のようになったとも言えるほどの、新しい、そして温かい人間関係が生まれたような印象を受けた。

最後になったが、ホームステイに協力して下さったご家庭にお礼を申し上げて、この高校一年生のホームステイに関する報告を終えさせていただくこととする。

(山口 治男)

1995.5.16

通学時間調査結果

先日、担任の先生方に調査していただいた結果の一覧表です。
なお、1年生に関しては通学時間、2・3年生に関しては通常時との通学時間の差を調べていただきました。

	1時間未満	1時間～ 1時間半未満	1時間半～ 2時間未満	2時間以上
1 A	14	19	15	8
1 B	16	15	13	11
1 C	16	11	17	11
計	46	45	45	30

	殆ど差はない (15分以内)	15～30分	30分 ～1時間	1時間以上
2 A	18	23	10	4
2 B	27	19	5	3
2 C	20	11	23	0
計	65	53	38	7
3 A	30	16	9	0
3 B	38	14	3	0
3 C	39	8	7	0
計	107	38	19	0
合計	172	91	77	7

3. 通学時間調査(中学校)
中学校は五月一六日より九時一〇分、第一限開始(五十分授業)となった。これに先立ち、通学時間調査が行われた。その結果をまとめたものが左記の配布資料であ

る。なお、六月一日段階の鉄道復旧状況をまとめた資料も合わせて所収した。

(大川 貴史)

鉄道復旧状況

数値950608

6 / 1 現在

既に開通済の区間は除く

日 付	会社名	復 旧 区 間	備 考
6 / 1 (木)	阪急電鉄	御影ー岡本	新開地ー三宮ー夙川間復旧 暫定ダイヤ
	神戸高速	高速神戸ー三宮	阪急電鉄相互乗り入れ区間
/ 5 (月)	神戸新交通	北埠頭ー中公園	島内周回運転可能
6 / 1 2 (月)	阪急電鉄	西宮北口ー夙川	全線復旧 ダイヤ改定
/ 1 6 (金)	山陽電鉄	滝の茶屋ー須磨浦公園	姫路ー板宿間復旧 暫定ダイヤ
/ 2 2 (木)	神戸電鉄	長田ー湊川	全線復旧 ダイヤ復旧
	神戸高速	湊川ー新開地	神戸電鉄相互乗り入れ区間
/ 2 6 (月)	阪神電鉄	御影ー西灘	全線復旧 新開地折り返し 朝ラッシュ…一部列車削減 そ の 他…ダイヤ復旧
7 / (上旬)	山陽電鉄	板宿ー西代	全線復旧 ダイヤ復旧
	神戸高速	西代ー高速長田	高速長田折り返し 山陽電鉄相互乗り入れ区間
8 /	神戸新交通		全線復旧
秋	神戸高速	高速長田ー新開地	全線復旧 (阪神・阪急直通可)

※JRが朝ラッシュ時に列車を増発していますが、私鉄復旧後も継続する様子です。

※神戸高速大開駅の再開は来年の見通しで、当分は通過します。

※7月以降も不通が続くのは以下の区間

神戸高速鉄道・山陽電鉄：新開地ー板宿間

六甲ライナー：アイランド北口ー住吉間

ポートライナー：中公園ー三宮間

本住吉神社行・阪神魚崎行代替バス

三宮 (市役所前) 行代替バス